

宙と対話する土地

高橋真理子

1 アラスカという土地の力

アラスカ……こうつぶやくだけで、胸が高鳴っていた時期があった。その高鳴りの導くままに、一人アラスカの大地に降り立ち、星野道夫に会った。私はそのとき二〇歳。『架空のアラスカ』に強い思いを抱きながら、困惑と不安と期待にまみれる私を見て、彼はこう言った。「漠然と「いいな」と思っていることは大切にしたいほうがいいよ。それがどういう意味を持つのかそのときはわからなくても」。「ぼくは、みんなが就職するときに会社を選ぶのと同じようにアラスカを選んだのだと思う」。

彼が何故アラスカを選んだのか、そんなことをここで考察せずとも、きっと他の多くの方々が書いていらっしやるだろうし、また私の拙い文章で彼にとってのアラスカの意味など大それたこと

を書けるわけもない。しかし、敢えて言うならば、「誰のためでもなくそこに存在している、わけのわからない広がり」……そんな存在の意味のなさの中で、途方に暮れる広がりの中で、自分の存在の意味を何度も問い直す。そういう作業を彼はずっとしてきたのではないか。土地の力に引かれるままにして。アラスカのどこまでも広い風景を目の前にしながら、かみ締めるようにつぶやく彼の声、「大きな風景だねえ」。そのどこまでも優しさと謙虚さを湛えたあの声が、まるで自分の存在を確かめているかのように聞こえるのだ。今でも耳の奥で。

2 北への憧れ

私にとってすべての始まりは、高校三年生のときにたまたま目

にした薄い雑誌のカラー記事。星野道夫とオーロラ研究の世界的研究者の赤祖父俊一氏がフェアバンクス郊外の湖のほとりで焚き火をしながら、オーロラやアラスカの自然について語っているのだった。そのわずか四ページの記事は、もともと思い込みの激しい私に、近い将来オーロラの研究をするのではないか、と思わせるのに十分な要素を含んでいた。すでに北への漠然とした憧れはあった。その記事が、憧れを目標に変え、北から自分が呼ばれる幻聴を作り出し、そうして私は大学を北海道に選んだ。オーロラを研究しようと思気込んで行った大学だったが、ここではオーロラなど地球の高層空間の現象に関する研究はやられていなかったことを、入学式の翌日に知ることになるのだが……。

北海道に移って間もないころ、『アラスカ 光と風』(六興出版)に出会う。星野道夫の「思い」の持ち方、アラスカへの行き方、オーロラを待つ話、すべてが琴線に触れ、アラスカに恋焦がれるようになった。正確に言えば、星野道夫を通してのアラスカに。そして、私にとってアラスカが本当に何かの重みを持ちうるのかを確かめるために、彼に手紙を書き、そしてアラスカへ行った。その土と風を感じ、星野道夫という人間そのものに触れ、赤祖父先生にも会い、待ちに待ったオーロラの乱舞に驚愕した。たしかな重みがあった。そして、一つずつ高くなっていく壁を思いながら、オーロラ研究への道を選択することになる。オーロラ研究という営みと、アラスカに住むということは全く別の事柄だと認

識しつつも、それをごちゃ混ぜにして、オーロラ研究をするためにアラスカに住むという「夢」が存在していることがそのときの私には大事だったのだ。

何故北に憧れるのだろうか。私にとってはこれは理屈ではなく、土地の力を感じるからとしかいいようがない。北海道の土地が教えてくれた、私にとって大きな意味を持つ自然の一つは、雪のすごさである。すごいというのは量だけのことではない。一晚にしてすべての汚いものを覆ってしまう速さ、その朝に訪れる独特の静寂、雪が降る前兆の確かなにおい、青空の下の木蓮のように一斉に咲く雪の花の美しさ、自分の髪に降りてくる結晶の愛らしさ、天を仰ぎ見るときの、吸い込まれそうな雪と闇のコントラスト……。これらを、自分が全くコントロールできないという切なさ、美しさと同時に畏れを感じさせる。こんな風に自然に対して狂おしいほどの感情を抱いたのは、北海道の持つ土地の力が、私の奥底まで響いたからだと思う。

極北のオーロラに憧れたのもまた、似たような理由かもしれない。天を切り裂くような光の渦、音もなくものすごいスピードで天を覆い尽くす光のその輝きと速さ、これがすべてを超越した美しさと思ろしきでなくてなんであるか。「この町の人々にとって、オーロラは珍しいものではない。にもかかわらず、天空を生き物のように駆けめぐる冷たい炎に、私達は足を止められ、何か大なるものの存在へと心が吸い寄せられてゆく。以前、冬の山

でたった一人でオーロラを見上げていた時、あまりの光の強さと雪面に反射した光で辺りが一瞬、昼間のように明るくなった。それは美しいというより、畏怖を感じる体験だった。「長い旅の途上」と星野道夫は記す。大いなるものの存在、北の自然は「おおらかな」というよりは、「凜としている」という表現のほうがずっと似合う。優しいというより、厳しい。それゆえにますます人を惹きつける。「きれいついていうより、こわいよね」という言葉は、彼の口からも何度か聞いた。彼は満天の星についてこうも言う。「夜空を見上げて星を仰ぐとは、気の遠くなるような宇宙の歴史を一瞬にして眺めていること。が、言葉ではわかっている、その意味を本当に理解することはできず、私達はただ何かにひれ伏すしかない」(『旅をする木』)。当時は、星野道夫にとってのアラスカの魅力と、私自身にとってのそれを何度となくオーバーラップさせながら、北の自然に惹かれる日々であった。

3 オーロラと自然科学

また来よう、と決意した私は、日本の大学院でオーロラの研究をはじめて二年が経過した一九九四年、再びアラスカ・フェアバンクススの地において、学会発表を行っていた。少し夢をかなえ、少し成長したかのように見える自分が誇らしかった。その発表をした夜、オーロラは初めて見たときよりも激しく、ピンク色ももなつて舞っていた。

研究者の中でも議論が続き、明快な解があるわけでは決してない。「知りたい」「その意味を理解したい」という人間の好奇心、欲望に支えられて科学は積み上げられてきた。「世の中に存在しているもの」に興味づけようとする欲望から私達は逃れられないのかも知れない。このように、人間による人間くさい営みであるにも関わらず、現代における「科学」というのは、ともすると「社会」から遊離して考えられがちだ。「オーロラの研究って何の役に立つのですか？」という質問は、今でも多くの研究者が聞いていることだろう。科学の活動そのものも、ある程度から先へ進むと、細分化の方向へ向かう。それぞれのやっている活動は、全体の中の一つであるものにも関わらず、お互いの関係は見えにくくなる。その活動とそれぞれの人々の生活とのつながりともなると、ますます見えないというのが現実だ。北への憧れとオーロラの研究をごちゃ混ぜにしてきた私にとって、自分と科学のつながりを見つけてるのは、だんだん困難なことになっていた。

4 一九九六年

一九九六年。そのころの私は、研究をはじめて四年が経過し、研究に魅力を感じられずいろいろなことが滞っていた。ほんとうに面白いと思うテーマが見つからない。テーマにしていることがなかなか「自分の問題」にならない、つまり本当に知りたいと思えない、そんな状況だった。いろいろな意味で、どん底にいた私

オーロラは、太陽から飛来する電気を帯びた粒子と地球の持つ磁石が相互作用して起こる極域特有の自然現象である。太陽からの粒子は、地球の磁場がバリアとなって簡単には地球に入り込めないが、比較的入りやすい場所もあり、それが極地方にあたる。その粒子が地球の大気(酸素や窒素)にぶつかり、特有の光が放たれる。このようなオーロラ光のメカニズム、さらにオーロラ全体の動きの様相、それが強く現れるときの宇宙空間の条件など、多くのことがこの三〇四〇年に解明されてきた。いわゆる「科学的

に」オーロラの説明がされてきたのは、観測技術が飛躍的に発展し、人工衛星によって宇宙空間から地球を眺められるようになってきたからだ。それまでは、地上から見ることで、全体からすればほんの一部の現象をつなぎ合わせ、全体の動きを想像するしかなかった。今は研究者の誰もが認める概念になった「オーロラ・サブストーム」(突発的に激しいオーロラが始まり、その後、広い範囲に広がっておさまるまでの一〜二時間程度の現象)は、アラスカ大学の赤祖父氏が六〇年代から提唱していたが、それが認められるまでに二〇年近い歳月がかかっている。これも人工衛星からオーロラが眺められるようになって、初めて納得されたものだ。最近では、太陽を観測している人工衛星の情報もほぼリアルタイムで得られ、また地球を周回する人工衛星による様々なデータを組み合わせることで、精度のいい「オーロラ予報」もできつつある。一方で、オーロラ・サブストームの直接的な原因などについては、

はある日、図書館で『旅をする木』(文藝春秋)を見つけた。図書館の中だったのに、泣けて泣けてしかたがなかった。懐かしいアラスカの匂い。失いかけていた自分が蘇る。夢におどっていた私はどこへ行ってしまったのか。

その後しばらくして、「星野道夫氏カムチャッカでクマに襲われ死亡」という衝撃的なニュース。それを知った夜から、毎日彼の本や写真集を眺めては何時間も過ごした。思えば、彼は夢へのきっかけを与えてくれただけでなく、いったいどれだけ多くのことを与え、教えてくれたことだろう。自然やすべての生命に対するいとおしい感情、わずかな可能性にかける情熱、時間・空間軸の中での自然と人間の関わりへの問い、人生の本質的な意味、何よりすべてのいのちに対する誠実さ……。私は再びアラスカに恋焦がれていたころの自分を思い起こし、そこから現在の自分を見つめ、混乱を来した。私は何か、何だったのか、何をめざし、何をやりたかったのかすっかりわからなくなった。どうしようもなくなり、三回目のアラスカに赴いた。

真つ黄色に染まるアスペンの林がどこまでも美しい九月のフェアバンクス。ミチオ・メモリアルは、彼が『旅をする木』の中に綴っている友人のパイロットのメモリアルを彷彿とさせる、人々の深い思い、悲しみ、そしてミチオへの感謝がいっぱいに詰まった素晴らしい会だった。人間とはここまで深く、愛し愛され生きることができるのか……。のちに、『ガイアシンフォニー第三番』

の中で聞く、メアリー・シールズの言葉「ミチオの人生の最終目的はヒトを愛することを学ぶことでした。彼はヒトを愛しきったのです」に象徴される、彼の生き方がそのまま現れたかのように。そのアラスカ滞在中、いったいアラスカが私にとって何だったのかずっと考えていた。星野道夫を通してのアラスカに幻想を抱いていただけだったのだろうか。あるいはもっと直接的な意味があったのだろうか。婦りの飛行機の中で、その答への一つとして「象徴」という言葉が思い浮かぶ。私は星野道夫を通してしか、アラスカを知らない。どこか実体にならない架空のもの、けれども何か重要なキーをにぎっている。初めてのアラスカが私にとって、一つの時代の始まりだったように、今回のアラスカがきっとその時代の終わりと同じ始まりをつくってくれる、そんな気がした。

『アークティック・オデッセイ』（新潮社）の中で、彼は、「テクノロジーは人間を宇宙まで運ぶ時代をもたらし、自然科学は、私たちが誰であるかを確かに解き明かしつつある。それなのに何故か、私たちが世界のつながりを語ってはくれない」と語る。このことは、実は、研究で低迷していた私そのものを言っているのかもしれない。自分とのつながりをそこに見出せなかった私に。それに続け彼はこうも言う。「それどころか、世界は自己から切り離され、対象化され、精神的な豊かさからどんどんと遠ざかって行く。私達は、人間の存在を宇宙の中で位置づけるた

そういったものを対立させず、静かに繋いでみたい、そして私はそれを実現させてくれるメディアにその翌年、出会うことになる。

5 科学と神話を繋ぐ「オーロラストーリー」

一九九七年、私はプラネタリウムという場所を仕事として得た。プラネタリウムは、私がそれまでに漠然と考えていた理想のミュージアム——総合的で、科学も音楽も芸術も文学も全部ひっくるめられるところ——にかなり近いメディアであることを、仕事を始めてから気づいた。プラネタリウム番組という、星、映像、音響をすべて組み合わせる展開する作品づくりを通して、科学とそれ以外のものを融合するのに、最高のメディアとさえ感じるようになり、私はプラネタリウムに携わって四年目に、星野道夫を主人公に設定したプラネタリウム番組「オーロラストーリー」を制作し、投影した。

舞台はルース氷河。彼はマッキンレー山の上に舞うオーロラを待ち続け、その間、オーロラ研究者との対話を思い出しつつ、一方で、先住民の人々のオーロラ観を回想する。「科学」でわかっているオーロラは、一言で言うところ「宇宙への窓」。オーロラを光らせる粒子は、宇宙空間のどこからでも地上に入ってこられるわけではなく、入ってきやすい条件を満たしているところだけに現れる。つまり、オーロラの出ているところは、宇宙へ開かれた窓である。一方、先住民の語るオーロラは、「死者がああ世へ向か

め、神話の力を必要としているのかもしれない。

この文章を読み直したとき、それが私の問題であるのと同時に、それを何らかの解決に向けてのものも私の問題ではないか、と気づいた。つまり、科学とそれ以外のものを駆使して、それらをつなぐことが、私の仕事になるのではないか。科学ですべてを語ろうとするのはやめよう、きつと科学とそれ以外のものを組み合わせるときに、自分に深い納得のときがやってくるに違いない、と。

自然科学、ことに基礎科学は、先ほども書いたように人間の「知りたい」「意味を理解したい」という欲望に支えられた活動だ。それはすべて「人間の営み」である。その先に何があるか。全宇宙の理解だろうか。おそらくそう思っている研究者はそうはいないのではないだろうか。少しでも理解したい、と願っている一方で、自然科学の研究者たちの多くは、何かがわかると、またその倍ぐらいわからないことがでてくる、というのを実感していると思う。宇宙全体の現象の中で、いったい自分達が何割ぐらい理解をしており、何割ぐらいわかっていないのか、それさえもわからない。発見されていない現象がいくつあるのかさえわからないのだから。だからいつまでも探究は続く。世の中には不思議に満ちていて、その不思議さはおそらく人間の時代を遥か超えて続いてゆくだろう。その不思議さが、人間の自然に対する「畏れ」をいつまでも残してくれる。科学が教えてくれる自然の不思議さと、人間の感情としての畏れ、また自然に対する懐かしさや愛おしさ、人

うときに、その道をワタリガラスがたいまつをもって照らしてやっている。これがオーロラだ」と。「宇宙への窓、死者がああ世へわたっていく架け橋、……地球と宇宙を結び、生と死を結んでいる」とナレーションが繋ぐ。そして、一ヶ月待った彼の頭上に狂わんばかりのオーロラが舞い、こんな「想い」に到達する。「ふたつのが重なった。人工衛星を飛ばして地球のしくみを理解しようとする試みも、先住民のように、自らの存在の意味を問い続ける物語も、それぞれが人間の作り出した神話のような気がしてならない」。彼は、オーロラを通してこう語ったわけではなかったけれど、それで彼が怒ることはないだろうという勝手な自信があった。彼の言葉を借りながら、私は「科学とそれ以外のことを融合することによって深い納得を得る」ことを具現化したかったのだ。ある来館者からの感想にこんな文章をいただいた。「科学とは」ということを、とても根源的な「人とは」「命とは」という視点を見失うことなく語っていると思った。表現するときが一番大切なことは「想い」だと思ふ。それが心の深みまで届いてきた」。ありがたい言葉だった。

もうひとつ、このストーリーの中で伝えたかったことがある。このストーリーの大本になったのは、『アラスカ 光と風』の「オーロラを求めて」の章だ。一八歳の私を興奮の渦に陥れた文章。マッキンレー山にかかるオーロラを撮るために、一ヶ月間、真冬の山にこもったときの話だ。何故こんなことをしてまで、写

真を撮ろうとするのだろう。「いったい自分は何をやるうとして
いるのだろう」と彼自身も何度も頭の中で繰り返す。私は今にな
ってこんなことを思う。このとき彼は、写真を撮ることを口実
に、実はそれまでに経験しえなかった宙と自分との対話を経験したか
ったのではなかったか。そのどうしようもなく畏れを抱かずには
いられない天の光と対峙することによって。そういった想いは、
ストーリー最後の彼の言葉に集約されてゆく。「僕は人間が究極
的に知りたいことを考えた。一万年の星のきらめきが問いかけて
くる宇宙の深さ、人間が遠い昔から祈り続けてきた彼岸という世
界、どんな未来にむかい何の目的をおわされているのか、という
人間の存在の意味。そのひとつひとつがどこかでつながっている
ような気がした。けれども、人間がもし本当に知りたいことを知
ってしまったら、私達は生きてゆく力を得るのだろうか。それと
も失ってゆくのだろうか。そのことを知ろうとする想いが人間を
支えながら、それが知り得ないことで私達は生かされているので
はないだろうか」(『森と氷河と鮎』)。

「オーロラストーリー」の投影にあわせて、オーロラクラブ(註)
との共催イベントとして、私の勤める科学館にアラスカ大学の赤
祖父氏をお呼びして講演していただいた。その講演の冒頭のスラ
イドにはびびくりした。それまでの一三年間を集大成させてもら
った「オーロラストーリー」の投影の日に、その始まりとなった
一九八七年の記事、星野道夫との対談の記事のコピーがそこに映

少し唐突だが、映画『千と千尋の神隠し』の主題歌「いつも何
度でも」の中に、「生きていく不思議、死んでいく不思議、花も
風も街もみんな同じ」というくだりがある。これを聞いた際に、
私は星野道夫を思う。生きていくこと不思議さを思う、探究す
る、考える……このことは、「生命の大切さ」を説くより、何倍
も、他者のいのちの存在を感じ、謙虚に生きることを促すのでは
ないだろうか。

この宇宙に存在するもの、星、ありとあらゆる生命、無機物、
人工物、そして自分。これらはすべて何かしらの関係性によって
結ばれている。生命を生み出したその前の生命は必ず存在する。
人工物はそれを作り出した人が必ずいる。その関係性こそ、自分
という存在を宇宙全体の中で位置づける、一つ一つの要素なので
はないかと思う。この関係性が多様であればあるほど、複雑であ
ればあるほど、その生は不思議と素敵に満ちてゆく。その関係性
について、人はあらゆる手段を使って解釈しようとしてきた。そ
の手段の一つが、科学であり、また物語である。違う視点を与え
てくれる対称的な二つの手段だ。しかし視点が違うだけで、その
目的は結局のところ同じなのではないかと思う。これらの解釈に
は、必ず想像力が必要だ。この点においても、物語も科学も同じ

し出されていたのだ。赤祖父氏が見事に、私自身の物語の、最初
と最後を見せてくれたかのよう。

「オーロラストーリー」の投影を通して、私は自身の物語を振
り返っただけでなく、制作に携わってくださった方、それを観て
くださった多くの方々がもつ「星野道夫物語」にも接することが
できた。日々の生活の中で、星野道夫が何を愛え、何を与えてく
れたのかを語ってくださった方、星野道夫を通して私に出会った
ことがきっかけで、新しい人生に踏み出した人もいる。人が何か
に出会い、誰かに出会った瞬間に、物語は生まれる。星野道夫は、
その肉体を亡くしてもなお、多くの人々を繋ぎ続け、そして物語
を創出している。彼はそうやって生き続けているとつくづく感じ
るのである。

6 生きていく不思議、死んでいく不思議、出会う不思議

先に書いた一九八七年の記事の中で、星野道夫はこう語ってい
る。「ぼくは不思議なものがいままでたくさんあってほしいん
です。言葉にならないような不思議なものって人を緊張させるで
しょう。アラスカにはいろんな生物がいて、オーロラが輝いて、
そういう緊張感を持って生きると自分がちっぽけだったり、すば
らしかったり、何ものなのかということもわかってくる。それは
結局自分が生きてるってことがどんなに不思議かってことを知る
ことなんじゃないか」。

である。関係性の中で自分の位置を知る——これは長い間、人間
たちがずっと試行錯誤してきたことなのだろう。

星野道夫にとってその関係性に対する想像力を最もかきたてて
くれる場所、それがアラスカだった。小さな自分に対して、あま
りに大きく、おそらく人間の解釈をはるかに超えてしまっている存
在……それが再び自分の存在を教えてくれる。生きていく不思議
と死んでいく不思議をどこまでも感じさせてくれる場所、として
星野道夫という人物が、一冊の本を通してアラスカという場所に
「出会い」、その星野道夫に私が一つの記事を通して「出会い」、
私がつくった番組を介してまた多くの人と出会う。こういった出
会いの不思議は、まさしく、生きていく不思議と死んでいく不思
議と同じぐらいの重さと深さを持つ。星野道夫が今なおつくりだ
す出会いの不思議は、彼の生と死の境界を不透明にさせているく
らいである。

註

星野道夫と大学時代の友人が中心となって、日本の子ども達をアラスカ
へキャンプに連れていくプロジェクトを行ってきた団体。

(たかはし まりこ・科学館学芸員)